

移動展示活動についての一考察

井出口 龍 哉*

A note on the traveling museum display

Tatsuya Idekuchi

鹿児島県立博物館では、昭和56年1月の新装開館以来、移動博物館・郷土博物館などの移動展示活動を実施してきた。本県は、およそ東西200km、南北600kmにもおよび、博物館活用のためには移動展（巡回展）開催はどうしても必要である。平成元年度は、昨年度実施した鹿児島国際火山会議特別展での展示資料をもとに、西之表市、名瀬市、鹿屋市で「巡回火山展」を開催した。この「巡回火山展」の実際をもとに、移動展示活動のあり方について考えてみた。多くの未熟な点があると思われるので、きたんのないご教示を賜りたい。

博物館における移動展示活動の位置づけ

展示活動は、多様な博物館活動のなかの重要なもののひとつである。鶴田総一郎氏は、展示の類別として右表のような考え方を示している（林 1981）。資料収集・調査研究の成果を展示活動によって紹介することになるが、その際、各類別基準のどの展示方法をとるかによって、参観者の受ける感じは違ってくる。展示は、モノを見せるだけではなく、ストーリーのしっかりしたシナリオがあり、意図されたものが参観者に伝わり、新しい発見と感動を与えるものがなければならない。

類別基準	種類
展示の場所	屋内展示と屋外展示
展示の動態	一定置展示と移動展示
展示の期間	常設展示と臨時展示
展示の目的	教育展示と鑑賞展示
展示テーマの設定	通常展示と特別展示
展示の素材	有形展示と無形展示

（林 公義（1981）より引用）

ここでは、“展示の動態”での移動展示、すなわち博物館の行う移動展（巡回展）はどう位置づけられるか考えてみる。

施設としての博物館が利用される範囲は、60分以内で来れる範囲といわれている。博物館友の会会員、ボランティアの方々もほぼこの範囲内にあるようである。この範囲は博物館地域とよばれている。現在では交通機関が発達しているため、地理的には範囲が広がったとはいえ、とても博物館を平等に利用できるわけではない。そのため、観察会・調査会などの館外活動を積極的に開催し、博物館事業を押し進め、博物館地域拡大の努力をしている館も多い。移動展、特に移動博物館のひとつの目的は、特定のテーマを設けた臨時展示・特別展示を館外で開催し、住民の博物館利用の機会を増やすこと、すなわち、博物館地域の拡大にある。

移動展示活動のもうひとつの目的は、実物資料による学習の場を提供することにある。博物館資料には、学校等にはない剝製標本・化石などの貴重な資料、身近な生きものによる自然を紹介する資料などがある。修学旅行・遠足等で研修ノートを片手に見学する団体も少なくない。

*鹿児島県立博物館

であるならば、私たちの方からも積極的に移動展示活動を展開する必要があるのではなからうか。大宮市立博物館の仁村氏(1986)は「来館を待つという発想から、資料を運んで見てもらい、手で触れてもらうという発想へ転換する必要があるのではないだろうか。」と説いている。アメリカなどでは、サイエンスカーによる巡回、借出しセットの準備などを行っている館もある。

この目的を達成するには、まず博物館と学校現場との連携が重要である。私たち博物館側の資料整備・体制づくりと学校現場の積極的な博物館活用がうまくかみ合うと、移動展示活動は大きな効果を上げられる。生涯学習時代に入った現在、一般の人々にも実物資料による学習の場を提供する必要がある。児童・生徒の博物館利用は、両親等へと波及効果が現れる。場合によっては、子供たちより大人たちが夢中になることもあり得る。

本県においても歴史民俗資料館(郷土館)、美術館、記念館が次々に設立され、各館それぞれユニークな展示活動を展開している。これらの博物館には特別展(企画展)を積極的に開催しているところも少なくない。さらに一歩進めて、お互いに、博物館資料を補い合いながらの移動展示活動も考えてよいのではなからうか。すでに、それを試みている館もあるので、今後さらに検討することにより、多くの住民が博物館資料を利活用できることを目指すことも必要である。

鹿児島県立博物館のこれまでの移動展示活動の概況

これまでの移動展示活動

昭和56年度から平成元年度までの実施状況を右に示す。56～60年度までは、「移動博物館」として「郷土の自然と科学の進歩」をテーマに、自然科学の学習コーナーと同時に、開催地の自然をも紹介してきた。ちなみに、和泊・知名町での展示内容を示してみる。

I 郷土の自然

○鹿児島県の地形・地質とおいたち ○霧島の植物、薩摩半島の植物 ○鹿児島県の哺乳類 ほか

II わたしたちの理科研究

○植物・貝・昆虫標本 ○理科研究記録

III 沖永良部の自然

○地形・地質・植物・蝶・その他

IV 科学の話題

○岩石・鉱物・化石 ○おもしろい昆虫の形
○植物と環境

V 実験・観察

○動くおもちゃ ○レーザーと伝わり方 ○顕微鏡を通して ほか

解説パネル、実物標本(化石・岩石・剥製)、自作機器、実験器具、顕微鏡などを「ミュージズ号」(専用マイクロバス)で輸送し、体育館、公民館を会場として開催された。輸送・展示はもちろん展示資料もすべて館員の手づくりによるもので、期間中「天体観測会」「自然観察会」も実施した。

62年度は「郷土科学博物館」として、大隅半島の南端佐多町で開催した。内容は、「郷土の自然」

年度	実施市町村名	参観者数
S56	内之浦町, 高山町 財部町, 末吉町, 霧島町, 牧園町 長島町, 東町 笠沙町, 穎娃町, 開聞町	9,354名
S57	根占町, 志布志町 出水市, 栗野町	8,330名
S58	知名町, 和泊町 阿久根市, 野田町, 高尾野町	7,981名
S59	徳之島町, 伊仙町, 天城町	6,281名
S60	名瀬市, 瀬戸内町	4,567名
S61	(ミュージズ号 廃棄のため中止)	
S62	佐多町	1,520名
S63	鹿児島市(国際火山会議特別展)	7,700名
H1	西之表市, 名瀬市, 鹿屋市	6,039名

「話題の標本」「身近に楽しむサイエンス」「路傍300種」「わたしたちの理科研究」のコーナーを設け、解説パネル約50点、剥製約30点、化石・岩石・昆虫標本、パソコン・実験機器などによって、「その地に博物館を創るならば…」という展示活動を展開した。さらに、「路傍300種学習会」「天体観望会」なども実施し、多数の参加者を得た。

63年度は、鹿児島国際火山会議特別展に、他分野の展示とともに教育委員会コーナーに展示した。

平成元年度は、このときに収集・製作した展示資料をもとに、「巡回火山展」を開催した。

当館の移動展の特徴は、教育展示であること、本館を閉館することなく行い、館員が解説・指導をするという点である。開催地教育事務所（局）および市町村教育委員会をとおして、学校現場との連携がスムーズにいき、多数の児童・生徒の参観があり、このことが一般住民にも波及した。ちなみに、佐多町の人口は5,000人足らずである。閉館して常設展示資料を活用する、資料展示後は会場管理者にその運営をお願いするなどの方法もあるが、移動展でなければならない展示活動を行い、教育活動も同時に展開するという事は、住民サービスの上から重要である。

巡回火山展の実際

(1) 実施要項（要旨）

趣 旨

郷土の自然、とくに火山活動についての理解と関心を深めるため、先の鹿児島国際火山会議特別展を活用して、火山と人とのかかわりについて認識を深め、さらに、動植物の標本等を展示することによって、豊かな郷土の自然や自然科学の学習の場とする。

期間および会場

平成元年8月19日～8月25日	西之表市立種子島開発総合センター（種子島 西之表市）
平成元年10月15日～10月22日	奄美歴史民俗資料館（奄美大島 名瀬市）
平成2年1月13日～1月18日	鹿屋市中央公民館（大隅半島 鹿屋市）

主催 鹿児島県立博物館 協力 開催地市当局および市教育委員会

展示テーマ	I 世界の火山と火山活動の起こる原因	II 日本の火山と噴火の様式
	III 鹿児島の火山と大地	IV 郷土の自然

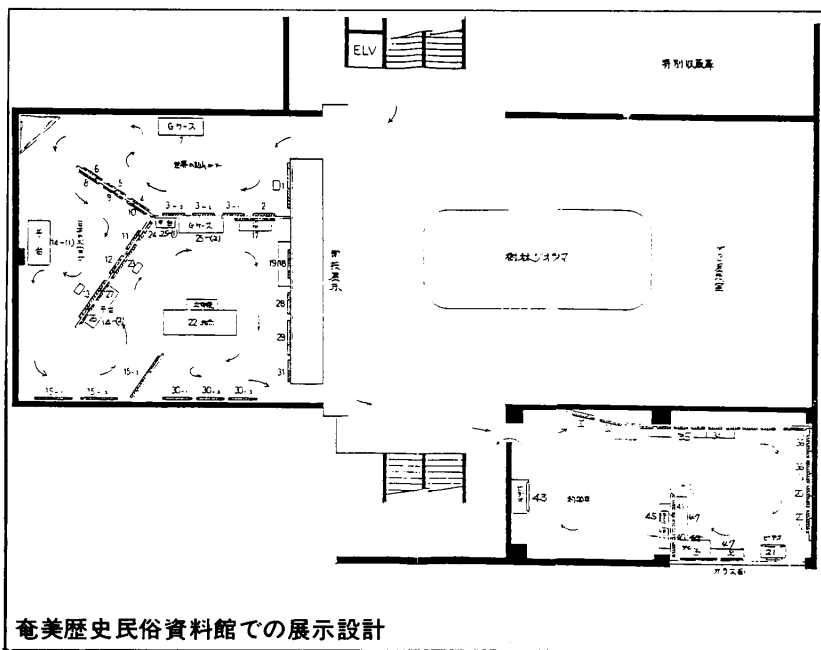
(2) 実施内容

① 展示設計

各会場で利用可能なスペースが異なり、3会場とも別々の展示設計をした。展示シナリオ・動線等が明確になるように配置するため、会場の下見時に採寸するのはもちろん各展示資料の寸法を計算して、展示委託業者と検討しながら設計図を完成した。図1にその一例を示す。番号は、解説パネル、展示台およびガラスケースを示す。展示台・ケースへの展示資料にも番号が付けてあり、展示資料リストをつくり、資料につけた番号と照合しながら、輸送・展示ができるようにした。

② 展示内容

解説パネル	51点	標本（火山噴出物・火山生成物・剥製標本など）	37点		
立体地形モデル	5点	溶岩・シラスからの製品	8点	立体視鏡と写真	3組
双眼実体顕微鏡	3台	偏光顕微鏡（テレビカメラ・モニターテレビ付）	2台		



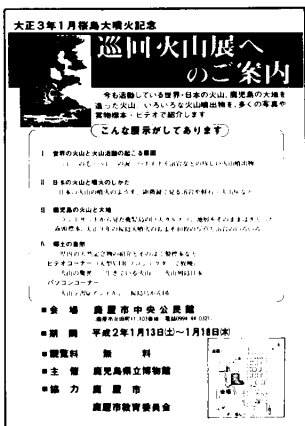
奄美歴史民俗資料館での展示設計

パソコン 2台 大型ビデオプロジェクターおよびテレビ 各1台

国際火山会議特別展での展示資料に、剥製標本を使った鹿児島島の自然の紹介、火山噴出物の加工品等の展示を加えた。映像展示は、大型画面（40型）のビデオプロジェクターと20型テレビの2台を使い、椅子を置いてゆっくり視聴できるようにし、テープも数種類準備した。パソコンには、「桜島鳥瞰図」（シミュレーション）と「火山学習Q&A」をセットした。剥製標本は触られるように、露出展示にした。随時展示解説を行い、特に、児童・生徒には火山学習となるように説明・解説した。

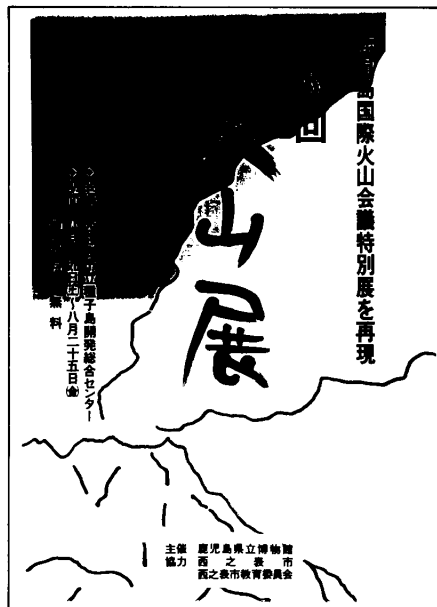
③ 広報

ポスター（B3判3色刷り）、チラシ（B5判1色刷り）、パンフレット（B4判両面1色刷り）を作成し、ポスターとチラシは該当市町村教育委員会をとおして、会場近隣地域の小・中学校に、県立・私立学校には直接送付し、児童・生徒への広報を依頼した。また、公民館、商店（商工会をとおして）、フェリー会社などにも貼布を依頼した。



↑ 鹿屋会場チラシ

西之表会場パンフレット →



市広報紙・広報車・有線放送による広報，報道機関によるニュース報道や紹介記事は非常に効果的で，参観者が増加しただけでなく，火山展の意義を高めた。パンフレットは，参観者全員に配布し，各学校に教材用としても配布した。

(3) 開催期間中の実際

各会場とも開会行事，テープカットを実施した後開会した。総計6,000余名の参観者があり，各会場それぞれ下記のような特色がみられた。

(西之表会場) 夏休み期間中のため学校関係の団体はなかったが，観光客の団体があり，常設展の民俗資料・種子島銃などの展示とともに熱心に観覧していた。地元の参観者も多く，親子連れや一般市民が珍しい火山噴出物などに感嘆していた。期間中隣の中種子町で開催した「路傍300種学習会」(路傍の昆虫・貝・植物・岩石など計300種を設定し，当館が展開している路傍に親しむ運動のひとつ)との相乗効果がみられ，移動展示活動のあり方を考えさせられた。

(名瀬会場) 10月の遠足シーズンで，児童・生徒の団体見学が多かった(8団体655名)。隣接町村からの団体(6団体)，個人での参観もあり，広報の重要さがわかった。期間中サンフランシスコ地震が起り，地震多発地帯だけに，火山と地震との関係に関心が集まった。また，奄美大島になぜ火山がないのかという質問が多く，移動展の展示内容に開催地の事柄の必要性を感じた。

(鹿屋会場) 大正3年1月12日の桜島大噴火を記念して大隅の中心地鹿屋で開催した。団体は少なかった(4団体約100名)が，一般市民・親子連れが多く，降灰シーズンでもあり，身近な桜島の写真ハネルやビデオに関心が集まり，非常に熱心な参観者が多かった。報道機関による報道の効果も大きく，テレビで観た展示資料は…，という参観者も多かった。



奄美歴史館でスタートした巡回火山展

火山のすべてが分かる
国際火山会議特別展を再現
奄美歴史館で巡回展始まる

奄美歴史館でスタートした巡回火山展。展示資料は，大隅の桜島大噴火を記念して大隅の中心地鹿屋で開催した。団体は少なかった(4団体約100名)が，一般市民・親子連れが多く，降灰シーズンでもあり，身近な桜島の写真ハネルやビデオに関心が集まり，非常に熱心な参観者が多かった。報道機関による報道の効果も大きく，テレビで観た展示資料は…，という参観者も多かった。

南海日日新聞 1989.10.16



巡回展のテープカットをする権田隆典(中央)ら=西之表市の種子島開発総合センター

「火山」知る資料一堂に
鹿屋会場で巡回展始まる

鹿屋市中央公民館で始まった巡回火山展。展示資料は，大隅の桜島大噴火を記念して大隅の中心地鹿屋で開催した。団体は少なかった(4団体約100名)が，一般市民・親子連れが多く，降灰シーズンでもあり，身近な桜島の写真ハネルやビデオに関心が集まり，非常に熱心な参観者が多かった。報道機関による報道の効果も大きく，テレビで観た展示資料は…，という参観者も多かった。

南日本新聞 1989.8.20

「火山」知る資料一堂に
鹿屋会場で巡回展始まる

鹿屋市中央公民館で始まった巡回火山展。展示資料は，大隅の桜島大噴火を記念して大隅の中心地鹿屋で開催した。団体は少なかった(4団体約100名)が，一般市民・親子連れが多く，降灰シーズンでもあり，身近な桜島の写真ハネルやビデオに関心が集まり，非常に熱心な参観者が多かった。報道機関による報道の効果も大きく，テレビで観た展示資料は…，という参観者も多かった。

南日本新聞 1989.1.14

巡回火山展始まる
鹿屋市中央公民館で始まった巡回火山展。展示資料は，大隅の桜島大噴火を記念して大隅の中心地鹿屋で開催した。団体は少なかった(4団体約100名)が，一般市民・親子連れが多く，降灰シーズンでもあり，身近な桜島の写真ハネルやビデオに関心が集まり，非常に熱心な参観者が多かった。報道機関による報道の効果も大きく，テレビで観た展示資料は…，という参観者も多かった。

南日本新聞
1989.8.20

南日本新聞
1989.1.14

どの会場でも、顕微鏡・立体視鏡・パソコンや剥製標本に親子連れや子供たちの人気が集まり、ビデオは、西之表・名瀬会場では「世界の火山」、鹿屋会場では「桜島」の視聴希望が多く、熱心に観ていた。

(4) まとめ

ア. 各市当局・該当教育事務所(局)・各市教育委員会および会場関係者に、会場の設定・広報などの準備段階から多くの協力が得られ、幅広く参観者を集めることができた。

イ. 広報は情報過多の現代ではなかなか徹底しないので、教育機関だけではなく各地区に浸透する方法(有線放送・回覧板など)、各種集会での紹介などの工夫が必要である。また、報道機関による紹介や報道の記事は、非常に効果的である。

ウ. 会場として、博物館施設と公民館施設を利用させてもらった。前者は、当館と同様な組織ができていたので準備・設営・運営などやり易く、相乗効果による参観者増が期待できるが、展示スペースが狭いこと、**「火山学習Q&A」に挑戦する親子(鹿屋)**入館料の取扱いなどの問題点もある。後者は、ロビーや研修室など展示スペースはあるが、展示に要する設備も持ち運ぶ必要があり、受付等すべて当館側でしなければならない。

エ. 他の博物館活動(自然観察会、科学教室など)を同時に実施する方がよい。

オ. 学校とは早目に連携をとり、団体参観をしやすいようにする必要がある。

移動展示活動実施上の問題点

当館で実施した移動展(巡回展)をもとに、このことについて考えてみる。

周知のように博物館法第2条に、博物館の行う事業のひとつとして「2. 分館を設置し、又は博物館資料を当該博物館外で展示すること」とあり、移動展示の重要性・必要性が明記されている。博物館の収蔵している資料は、広く住民に活用されて始めて生きてくる。ところが、住民側から見ると地理的・時間的条件からその活用が困難な場合がある。交通が便利になったとはいえ、博物館地域が広がったとは言い難い。広い鹿児島県の県立博物館にとって、移動展示活動を展開することは、住民サービスの重要な事業のひとつといえる。しかし、常設展をしながら移動展示活動を実施するには多くの困難がある。次にそれらの問題点を上げてみる。

(1) 常設展示資料以外に移動展示のための資料の収集・製作

「巡回火山展」の資料は、特別展で収集・製作したものを中心に利用したが、以前の移動博物館等では館員の手づくりの資料が使われた。館員の調査研究の成果を発表するチャンスとなるというメリットはあるが、テーマの設定・資料収集・展示資料の作成などに多くの準備期間を要する。

(2) 会場・広報などについての受入れ側との連携



立体視鏡をのぞく子供たち(名瀬)



「火山学習Q&A」に挑戦する親子(鹿屋)

当館では、開催地の市町村教育委員会を窓口として協力を依頼してきた。「巡回火山展」で始めて博物館施設を会場とした。相乗効果があるという点では、お互いの協力が生かされた。2会場とも必要に見合う展示スペースを提供してもらえたが、移動展の規模によっては企画展示室等があっても狭い場合がある。受付、展示資料の管理などの協力が得られやすく、各市町村立の博物館との連携の上からも、さらに検討を加えてもよいのではないと思う。また、短期間ならば学校の体育館、公民館なども考えられるが、連携を密にする必要がある。

(3) 開催期間中の館員配置

自然観察会や科学教室を同時に開催することによって、準備・撤去時の人数を増やすと同時に、多様な博物館活動を展開できることになる。しかし、構成員の少ない場合、調整がつかないこともあり得る。館員外の協力が得られれば、さらに移動展の効果は上がると思う。

(4) 展示資料の輸送と展示業務

どこまで館員でやれるのかむずかしいところで、専用サイエンスカーで輸送し、館員で展示する方法もあるが、業者委託の方がより効率的である。(3)の方法で、展示作業は館員でやるのではないと思う。いずれにしても展示資料・器材・消耗品の綿密なリストをつくり、これをもとに輸送の際のチェックや展示設計を行う。また、展示資料は輸送・移動展示までを考慮して製作する。

(5) 広報活動の方法

移動展示活動をする以上、ひとりでも多くの人たちに参観してもらいたい。生涯学習という点から、児童・生徒のみならず一般の方々も大いに参観してもらいたい。そのために、開催地および近隣地域への広報は非常に重要である。「巡回火山展」での広報活動は、前述したとおりであるが、一般住民への広報が不足したと思う。商工会をとおしたポスター貼布以外に、実行委員会組織などによる広報活動はできないものだろうか。

(6) 展示の内容

今までのものと「巡回火山展」との違いは、前者の場合総合的展示であったのに対し、後者の場合特別テーマによる移動展であった。今回の場合、児童には内容的にむずかしい点もあったが、中学生以上、特に一般には十分中味のある展示であった。すなわち、何を展示するかによって(1)~(5)の問題点の解決法が決まる。展示の内容については最初に十分検討吟味しなければならない。

今後の課題

考察を加えながら、今後の移動展示活動の今後の課題について述べてみる。

移動展の重要性・必要性は改めて言うまでもないし、遠隔地の人たちは待ち望んでいる。生涯学習が叫ばれている現在、その拠点としての博物館は、館内での諸活動を充実させることはもちろんだが、館外活動も積極的に実施し、多くの人たちに学習の場を提供する必要がある。学習の場としての移動展示活動はどうあるべきなのだろうか。

児童・生徒を対象とした移動展示は、学校現場との連携によって十分その効果は上げられる。また、この効果が一般住民へ波及することによって生涯学習の場ともなり得る。従って、広報活動はもちろん重要であるが、学校現場といかにスムーズに連携するかも重要である。さらに、どのような資料をもっていくのか、館内の考えだけでなく学校や住民の考えを反映させる必要もある。開

催希望の有無，内容に対する希望などアンケート形式でもとり寄せられないだろうか。現有の資料を示して希望を聞いてもよいと思う。開催地，内容をいかに早目に決め，工夫を凝らしていくかが，今後の課題のひとつである。

当館で実施した移動博物館で好評だったのは，児童・生徒の理科研究記録作品とか開催地の自然を紹介した「郷土の自然」であった。参観者は最も身近なものに興味を持つということであろう。身近なものからいかに多くのものを学んでもらうかが，展示資料の収集・作成のポイントとなりそうである。このことは，巡回火山展でも，地震多発地帯である名瀬会場では火山よりも地震に，鹿屋会場では桜島に関心が高かったことからいえる。“鹿児島 naturally, 過去と現在”“路傍の動植物の移り変り”“減った動物・増えた動物”など，自然の紹介の中に「時間」による変化を織り込むことによって，身近なものから多くを学ぶ展示ができないものだろうか。開催地の自然を紹介する中にも織り込めるかもしれない。身近なものを取りあげた資料づくりが今後の課題となる。

移動博物館として県下各地で，恵まれた自然を紹介しながら「自然に親しむ風土づくり」を目指し，生涯学習での自然科学学習の場を提供することの意義は大きい。また，県立博物館ならではの移動展示活動が展開できるならば，博物館地域の拡大，住民サービスの増大となり，豊かな自然への認識がさらに深まると思う。

おわりに

本県教育委員会では，芸術作品の巡回展「かごしま秀作ギャラリー」を開催している。また，他にもいろいろな移動展が実施されている。本稿では，博物館における移動展示活動について考察してみた。おわりに当館における今後の課題をまとめてみる。

1. 教育関係機関との連携をはかり，幅広い年齢層の生涯学習の場となるように内容・広報を工夫し，同時に教育普及活動等も実施する。
2. 身近なものを素材とし，研究成果を十分盛り込み，親しみやすい中に新しい発見・感動をよぶ展示資料を作成する。
3. 努めて多くの地域を廻り，特に，離島での移動博物館開催の機会をつくる。

問題点をひとつずつ克服しながら，この課題を目標として，また，多くの方々のご意見等も参考にしながら次の移動展示活動の機会を待ちたい。

なお，巡回火山展など移動博物館では，非常に多くの方々にお世話になった。最後になったが，これら多くの方々から心からお礼を申し上げたい。

参 考 文 献

- 倉田公裕，1979. 博物館学，東京堂出版
- 加藤有治，1977. 博物館学概論，雄山閣出版
- 林 公義，1978. 博物館概論：第三章 展示，301～333，学苑社
- 岩井重三ほか，1981. 博物館学講座 第7巻，展示と展示法，雄山閣出版
- 恒吉正巳，1985. 奄美大島における移動博物館，博物館研究 20(9)：0－11
- 仁村 勉，1986. 一小中学へ出向く－大宮市立博物館巡回展，博物館研究 21(11)：53－56